



Title	Session3,4. 食性と生息地利用
Author(s)	青井, 俊樹; 大館, 智志
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 8-9
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91572
Type	report
File Information	session3_4.pdf



[Instructions for use](#)

SESSION III, IV. Food Habits and Habitat Use

食性と生息地利用

青 井 俊 樹
大 館 智 志

この SESSION は16題と最も演題が多く、2部に亘って開かれた。講演は、ハイイログマに関するものが一番多く、次いでアメリカクロクマについてのものが多かった。その他に、アラスカヒグマ、エゾヒグマ、ツキノワグマ、メガネグマについての発表があった。

その中には、クマの採食地利用とその環境の質的、量的評価との関連を論じた発表がいくつかあり、特に D. J. Mattson らの発表が印象深かった。彼らはまず、ハイイログマの食性と採食地利用の季節的变化を調べた。次に、その採食地を栄養学的に利用可能度を用いて評価し、実際の採食地利用との関係を調べた。結果は、春と秋に採食地の利用可能度と実際のクマの利用頻度との間に正の相関が認められ、またクマの生理的状态(妊娠、冬眠など)により異なった採食戦略をとる、というものであった。

また、林業がクマ類の生息地利用あるいは個体群にもたらす影響について述べた発表もあった。いずれもアメリカクロクマに関するものであったが、1つは G. S. Warburton の発表したクマのサンクチュアリー——このようなものがアメリカでは堂々と存在しているのである！——内における森林の取り扱い方の問題、もう1つは A. J. Brody らの発表した、狩猟地における森林伐採がクマの個体群に与える影響に関する報告であった。前者では、ハンティングの影響をまったく受けていない多数のクロクマを追跡した結果、伐採を行なっている所や成林したマツ林をクマが避ける傾向が強く、堅果を实らせる林が重要な位置を占めている。しかし、こういった林が、施業によりポプラの林に更新されたり、もとの状態に戻るのに100年以上を要するナラ林が更新のために伐採されることは、クマにとっては非常に厳しい状態になると報告している。またさらに、生息地を良好に維持するため、伐採単位を25エーカー以内に押えろとか、生息地の5%は250年以上の老齢な林を残す、また逆に種々の木の実の生産を促すためにきちんと制御しつつ火入れを行なう、さらには林道の建設を制限するなどの指標が述べられていた。また後者では、狩猟圧に働く要因としての森林の伐採が、クロクマ個体群にどのような影響を与えるかを調べたものであった。この結果によると、伐採を制限したり林の取り扱いを考慮することなどにより、その生息環境はクマの収容力を増すことが可能であるが、その取り扱いを慎重に行なわないと逆の結果にもなりうる事が示唆された。例えば施業に伴う林道網の発達にはハンターがその道路を使うため、結果的にクマを捕り易くしてしまうだろう。これらの発表で提起された問題、つまり野生生物の生息地と

しての森林と林業の兼合い、あるいは狩猟の規制と生息地の維持等に関する問題は北海道が抱えている問題と共通なところがある。このことについて我々も今後論議を深めていかなくてはなるまい。

植生に急激な変化を生じさせるのは森林の伐採だけではなく、その原因の1つに山火事がある。S. Herrero は山火事跡地に生ずる草地や灌木地が、ハイイログマによって採食地として利用されることを報告した。この結果と、北海道北部の山火事跡地がうっそうとしたチンザサで覆われ、ヒグマにとって採食地としてあまり利用できないことと比べてみると、改めて環境あるいはクマの生息地の違いが思い起こされる。また、北米では、ハイイログマやアラスカヒグマが大型哺乳類の捕食者となることがしばしばある。H. V. Reynolds 三世らは、ハイイログマのカリブー（大型のシカの仲間）捕食について報告をした。カリブーを捕食することはハイイログマにとって個体群の質を向上させる要因となっており、カリブーの群れに近いところのハイイログマの個体群は、そうでないものよりも密度や繁殖率が高かった。

一方、日本からは、我々のヒグマの食性についてのものと羽澄（野生動物保護管理事務所）らのツキノワグマの生息地利用についての二つが発表された。

この SESSION においても他の SESSION と同様に、多くの研究者はクマの保護管理の考えを根底に持っていたようだ。また、D. J. Mattson らの報告のように、社会生物学あるいは行動生態学などを意識して研究を行っている人もみかけられ、生物学的な課題に取りくんでいこうとする傾向も感じられた。しかし取り立てて目新しい手法を用いて行なった画期的な報告というのはみられず、オーソドックスなものが多かったと言えよう。ただし、生息地利用に関する報告のほとんどがテレメトリー法を極めて普通に用いて、かつ多頭化して行なっている点は、彼我の違いを感じずにはいられなかった。その面では、ツキノワグマの多数個体の電波追跡によるミズナラ林の利用に関する報告は、北米の調査報告と同じ土俵で考えられるものであった。その点、エゾヒグマは大きく出遅れていると言わざるを得ないと感じた。